

17. 親のしつけ態度とその要因（第4報）

親に対する子供の考え方を中心として

東京学芸大 田村 喜代

1. 子供は家庭内にいる限り自由で、社会の規範に拘束されず保護されており、社会的圧力は親によって受け止められている。が半面親はその圧力を自己を通して和らげ子供に伝える社会化の役割も果している。これがいわゆるしつけであって、子供の性格をゆがめぬようにしつけすることは容易ではない。殊に子供が幼い時は親を絶対的権威者として信頼しているが、自分達の生活環境が次第に拡大・分化してくると、その信頼が弱まり自我意識が目ざめ、自主独立の精神によって親子関係は一層微妙な間柄となってくる。そこで小・中学の子供達の親に対する考え方を把握し、親のしつけ態度、諸要因関係について調査した結果を報告する。

2. 親を批判する考え方（非好意的）親を肯定する考え方（好意的）から成る14個の構成文を作製し、昭年35年6月～8月しつけ調査の2として同時に実施、資料をガットマンの尺度分析により、好意点の高い組低い組おのおの25%を抽出し、相互の比較を11領域における親子一致のしつけ態度、並びに前回まで報告した諸原因との関係に求めてみた。

3. 全般的な単純集計の結果にはかなり期待通りの成果もあったが、尺度分析のものについてはやや設問などに不備があったものか、ガットマン尺度は理論的に厳格すぎる構造だといわれているが、再現性係数に問題点を残し予想した程成果は得られなかったが、一つの反省として今後の研究に譲りたいと思う。